

キーワード **親鸞** **ビハーラ** **現生正定聚** **自然法爾**

念仏信仰とは、文字どおり念仏によって浄土往生を願うものであり、言い換えれば念仏による生死出離の道であり、本願による救いと覚醒である。しかも、聖道難行の道に対して浄土易行の道であるがゆえに、家庭生活を営みながら凡夫の歩める道である。

もちろん、誰しものが歩める道ではあるが、老病死の苦を意識し始めた高齢者、病者、末期患者においては、その事がより直接的に果題となっている。私たちは念仏信仰の臨床での展開と実践をビハーラ運動と名づけて活動し始めて久しい。

それは、親鸞が明らかにした救いの迫体験である。すなわち、それは

「本願を信受するは前念命終なり 「即ち正定聚之数に入る」 文「即の時必定に入る」 文
「また必定の菩薩と名づくる也」 文

即得往生は後念即生なり。他力金剛心なり」 (『愚禿鈔』・『定本親鸞全』2-漢13)

と、示されるように、現生において、自力に命終して他力に即生することである。

親鸞は『大経』成就文の「即得往生」の即を即時、即位に解釈し、従来の念仏信仰の救済のあり方を現生に正定聚に住すとし、

「臨終まつことなし、来迎たのむことなし。信心のさだまるとき往生また定まるなり。来迎の儀式をまたず」 (『末燈鈔』・『定本親鸞全』3-書59)

という。

念仏は非行非善であり、また無義為義である。真實信心を獲得するとは、自力による一切のとりわれを離れた自然法爾の世界に目覚めることである。

「自は、をのづからといふ。(略) 然といふは、しからしむといふことばなり、しからしむといふは行者のはからいにあらず (略)、自然といふは、(略) 行者のよからんともあしからんともおもわぬを、自然とはまふすぞとききてさふらふ。」 (『末燈鈔』・『定本親鸞全』3-書13)

「あるがまま」に「有らしめられる」という境地に立つことにおいて、老いるままに、病むままに、死ぬるままに、救われていくという立場である。自然のままの世界である。そのめざめの体験を事例に学んでみたい。

事例1 韋提希夫人の「得無生忍」第七華座観での空中に住立する阿弥陀との出遇い

事例2 清沢満之『わが信念』『絶対他力の大道』

事例3 阿部幸子『いのちを見つめる—進行がんの患者として—』(2005 探究社)

「死を前にして思うこと」 「癌になる前は、自分の力で生きているのだと自信過剰な私であった。人生の困難に直面しても、脱出路を見出だすことも出来たし、様々の状況に柔軟に対応する能力もある。まあまあ自分であると思っていた。」 「癌に直面した私は病という人生上の困難が、同じ困難ではあっても、未知なものであることに気付いた。進行癌のすぐ向こうに死が控えているのだから。それまで、ただひたすら己の信じる道を歩き続けて来たが、立ち停まらざるをえなかった。まず第一に浮かんだ疑問は、これまでの人生を本当に自分だけの力で生きてきたかどうかということであった。」 他力によって生かされて来たのだ “と。なぜ今までこんな単純な真理に目を閉じていたのだろうか。気付くのが遅過ぎたと思うと同時に、気づかぬまま死ぬよりよかったと。やっとの思いで、終バスに乗車できたのである。

事例4 鈴木章子「癌は私の宝です」 『癌告知のあとで—私の如是我聞—』(1988 探究社)

事例5 水上勉「何もかもかも仏に任せる 他力を意識しはじめたのは・・・」(2002・7・22『朝日新聞』) 付) ビハーラ医療団(1988年結成、ビハーラを実践する医療関係者のネットワーク組織)の活動

